
白夜の瞳に映るのは・・・

牛和歌丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白夜の瞳に映るのは……

【Nコード】

N6188V

【作者名】

牛和歌丸

【あらすじ】

ある日万事屋に入った一本の電話。

その電話の主は銀時が会っている間に、新八と神楽は神威達に人質にとられてしまう。

そして、怪我を負わされた二人を見た銀時は突然子供っぽい口調で話始めた。これがすべての事の発端だった。

銀時の隠された秘密とは！？

この話は原作に沿っていません。

ブローグ〜白夜族〜（前書き）

初めての小説なので、色々おかしい所があるかもしれませんが、生温かい目でみてやってください。

ブローグ〜白夜族〜

ここは真選組屯所の資料室。

空気の入れ替えのために窓が開いている。

その窓の近くには一冊の資料があった。その資料は「絶滅した天人」と

記されていた。

資料を風が、あるページを開かせた。

「白夜族」

「かつて夜兎族などの宇宙最強戦闘民族よりも高い戦闘力を持っていた

本当に宇宙最強の民族。

だが、元々多い民族ではなかったので、自然災害によって絶滅したとされる。

白夜族の特徴は、透きとおるような銀髪に、紅い瞳、白い肌とされた。

白夜族には決して破ってはならない掟があったという。

人間と子をはらむな。

この掟の真意は不明。だが、これを破った白夜族は殺されたという。

┐

そして、ボロボロだった資料は、ビリリという音と共に

大きく破れた。

ブローグ〜白夜族〜（後書き）

妄想についてこれたでしょうか？

第一訓 名乗った人にだけ会いに行きなさい。偽名を使われたら諦めて誘拐さ

ようやく本文です。

ありきたりな始まりですよ！

第一訓 名乗った人にだけ会いに行きなさい。偽名を使われたら諦めて誘拐され

「銀ちゃん。酢昆布食べたいネ！」

「あー？お前は酢昆布の国から来た酢昆布姫ですか？コノヤロー」
このような間の抜けた会話をしているのは万事屋で働いている宇宙最強戦闘民族である夜兎の神楽と、その万事屋の主の坂田銀時である。

この2人、間の抜けた会話はしているが結構目立つ。
なぜなら、神楽は酢昆布中毒と人間らしい風貌とはいえ、傘と白い肌ですぐに夜兎とわかるし、
隣にいる銀時も銀髪と紅い目で目立つ。そして神楽程ではないが、かなり肌も白い。

今、異色の髪色は珍しくはないが、銀時の場合、眉も睫毛も銀なので地毛とわかる。髪は染めている者は多いが、地毛では珍しい。それに加え、紅い目をしているので目立っているのだ。

「にしても、今回の依頼のおかげで食費がなんとかもちそうですね」
こう言ったのは、今まで存在を忘れられていた、ツツコミ担当の志村新八である。

唯一目立たない見た目をしている。ようするに地味なのである。

「ちよつと！なんで僕だけがこんな扱い！？」

あ、眼鏡をしています。本体と間違われやすい。

「……………もういいです」

大丈夫です。作者は好きですよ新八。8番目ぐらいに。

「いらぬ同情です」

そんな3人は珍しく来た依頼の帰り道だった。

「……………やつと……………見つけた……………」

3人を見ていた1人の男の天人が呟いた。

「ったく。せつかくの依頼料も、神楽と定春にかかればすぐに消えちまうだろーが」

万事屋についた銀時は愚痴っていた。

「そんな銀さん、今に始まった事じゃないでしょ」

「そうネ」

「お前が言っな!!!」

銀時と新八がつっこんだ。

そんな事には興味がないというように、定春があくびをした瞬間、（ていうか、定春と神楽の食費の話をしていたのだが）

電話が鳴り響いた。

「ん？また依頼か？」

「珍しいですね。早くでましようよ」

だが、銀時は嫌な予感がした。新八が電話を取ろうとした手を無意識のうちに止める程に。

「銀……さん……？」

新八に話かけられて初めて、新八の手を止めていることに気がついた。

「あ、悪い。電話俺がでるわ」

「そう……ですか……」（珍しいなあ、銀さんはほとんど電話になんかでないのに。）

「はい、もしもし、万事屋銀ちゃんですけど」

銀時はこの時ばかりは、お登勢の家賃請求が良いと思ったが、残念ながら家賃請求は直接来るのだ。

なのでありえない。

電話の声は声を変えているようだった。まともな奴ではないことは

確かである。

そして、同時に依頼でもない。依頼だったら声を変える必要はない。
「なんの用だ」

新八達には聞こえないように、声をひそめて言う。

依頼じゃないと分かったら、敬語を使う必要はない。

「すぐに．．．．来て．．．もらおうか．．．」

「お前は、誰だ」

「天導衆の使い．．．．とだけ言っておこうか」

第一訓 名乗った人にだけ会いに行きなさい。偽名を使われたら諦めて誘拐され

うわ・・なんか変ですね。

読んで頂き、ありがとうございます。

第二訓 白夜って、びゃくやって読んで下さい。(前書き)

妄想し放題です。

第二訓 白夜って、びゃくやって読んで下さい。

「天導衆？幕府おかみの、お偉いさんか？」

「そうだ。俺はその使いだ」

（はぁ．．．．．、こりやばれたか？せめて、髪を染めときゃ良かったな）

銀時の思考は、声の主によってさえぎられた。

「おい．．．．、聞いているのか？」

「あー、聞ってる、聞ってる、で、その幕府のお偉いさんが、こんな細々とやっている

万事屋に何の用で？俺は、何もしてねーぞ」

「．．．．．、天導衆うっえからは、こう言えばいいと言われた。．．．．
白夜族を保護する．．．

と．．．．．」

（げ、やつぱりばれてやがる。まあ一応とぼけとくか．．．．）

「あー。俺はそんな民族、知らねえな。他をあたってくんねえ？」

「．．．とぼけるな。．．そんな．．堂々とした風貌で．．．誤魔化そうというのか？」

（あー、やつぱり？ま、これじゃ、自分の事看板背負って歩いてるもんだからなあ。絶滅してるからって、油断しすぎたか．．．．」

「．．．．で、どうすれと？」

銀時は渋々ながらも、用件を聞くことにした。

「とりあえず．．．．来てもらおうか。お前の近くに団子屋があるだろ？そこに来い」

「へいへい．．．．．」

そうして、銀時は相手の返事を待つことなく電話を切った。

「悪いけど、ちょっと空けるわ」

「え？僕達も行きましょうか？」

「そうアル。また依頼でしょ？」

2人は銀時のいつもとは違う、いや態度はいつもと同じ気だるそうなのだが、どこかが

違うと敏感に感じ取っていた。

「いや、俺、1人で大丈夫。お前らは留守を頼むわ」

銀時はいつもと同じようにするよう努力した。

2人を危険に巻き込む可能性がある。銀時はそれだけは避けたかった。

護れる場所にいるのに、護れない。

これ以上に悔しい事はなかった。

危険な目にあうのは、自分だけでいい。

銀時はそう思っていた。

「いや・・・でも・・・」

それでも、新八達は食い下がらなかった。

「いや、大丈夫だって。銀さんそんなに出来ない子？銀さん泣くわ」

新八と神楽は、これ以上粘っても無駄だと思ったのか、

「分かりました。でも早く戻って来て下さいね」

「そうアル！早く戻って来なかったら、酢昆布10年分の刑にする

ネ！」

銀時は、そんな2人に少しだけ笑うと、

「おう」

そう言って出て行った。

そして、銀時は2人を連れて行くべきだったと、

後悔することになる。

第二訓 白夜って、びゃくやって読んで下さい。(後書き)

銭湯編のアニメには大笑いしました。
アンタも好きねえ、シャチヨさんが、頭から離れないです。
どうしましょう。

第三訓 相手を確認してからドアを開けましょう（前書き）

エラーが・・・エラーがああああ！！！！

第三訓何回書けばいいんだ・・・・・・・・・・。

何か書くたびに変わってる（笑）

同じの書くのつまないじゃん！！

第三訓 相手を確認してからドアを開けましょう

銀時が出て行ったあと、新八と神楽は黙ったままだった。
が、考えている事は同じだった。

そして、この沈黙を破ったのは神楽だった。

「ねえ、新八。銀ちゃん見送って良かったアルか？あの電話、依頼なんかじゃないネ」

それは新八も分かっていた。民族や幕府など、依頼とは到底関係無さそうな単語が

ちよくちよく聞こえてきた。

「うん……。それは僕も分かっているよ。でも、銀さんはどんなに粘っても

連れて行ってくれないよ」

神楽はしばらく黙ったあと、

泣くのをこらえているかの声で、

「私達、銀ちゃんから見たらそんなに弱いアルか？頼りないアルか？
もっと、強かったら銀ちゃんも連れて行ってくれたアルか？」

そんな神楽を見た新八は

「それは……。銀さんにしか分からないよ」

としか、言いようがなかった。

神楽ちゃんの言うとおり僕達はそんなに頼りないんですか？銀さん。
ちゃんらんぼうのくせにいつも肝心なところで誰も頼ろうとしない
で。

いつも1人で解決しようとして。

他人を護る時は自分の命より優先するくせに、
何で誰にも護られようとしないんですか？

僕と神楽ちゃんは銀さんの目に映っていないんですか？

でも、銀さん。あなたがどんなに嫌がろうと、
銀さんを護ります。

銀さんがいつも僕達を護り続けてくれるから、
僕達も銀さんを全力で護ります。

たとえ銀さんが僕と神楽ちゃんの事など目に映っていなくとも、
僕達が銀さんを見ています。

銀さんが見てくれるまでずっと見ています。

だから、銀さんの傍にいます。

「そうネ！！眼鏡^{しんはち}にしては良いこと言うアル！！

私達が護るアル！！嫌がろうが何されようが護るアル！！

ずっと銀ちゃんを見て、傍にいるネ！！早速銀ちゃん探すネ！！」
すっかり元気を取り戻した神楽が言った。

「うん！そうだね・・・って！！何で人の思考を読んでのん！？」

「新八^{めがね}が全部声に出していたネ」

「うそお。何か恥ずかしい・・・」。

その前に、何でさっきから眼鏡？」

「ノリネ」

すっかりいつもの調子に戻った神楽を見て、新八は笑ってしまった。

「何笑ってるアルカ！！」

「ごめん、ごめん」

2人の目が合い思わず笑ったその時

ガララという音と共にドアが開いた。

「あれ？銀さんじゃないかな？」

新八がドアに駆けて行った。

しかし、神楽は違った。

「ダメアル！！新八！！ドアにいる奴、銀ちゃんじゃないネ！！」

神楽は感じていた。自分と同等か、またはそれ以上の者が万事屋に入ってきたと。

「え・・・？」

新八はもう遅かった。首には傘があてられていた。

その傘と匂いで神楽はもう顔を見なくても誰か分かっていた。

「神威iiiiiiii！！！！」

新八を人質にとった、神威と呼ばれたミツアミの神楽そっくりな天人^{ひと}が口を開いた。

「久しぶりだね。元気にしてた？」

人質をとっているのにも関わらず笑顔だった。

第三訓 相手を確認してからドアを開けましょう（後書き）

最初、神威は登場させる予定はありませんでした。

エラーのおかげで登場です。

今回は大丈夫だった！！

第四訓 あらすじに追いつきたい（前書き）

さるお方の名前が長すぎる件について。

寿限無・・・・・・・・何だっけ？2回続くんだった？
忘れた・・・・・・・・。

一昨日の新ちゃんのパンツがどっかにあった（笑）

第四訓 あらすじに追いつきたい

新八達が神威の襲撃を受けたほぼ同時刻、
銀時は電話の主の待ち合わせ場所にいた。

「ったく、普通呼び出した方が早めに来るんじゃないの？」

銀時は待ち合わせ場所の団子屋でばやいていた。

ただ、いつもなら団子を食べているところだが、今日はさすがに食べしていない。

食べるのに集中していて、後ろからズドンじゃ、シャレにならないからだ。

「旦那、食べないんですかい？」

団子屋の主人が聞いてきた。

「ああ、今日は待ち合わせで来てるんだ。悪いがまた今度な」

主人が冷やかすように小指をたてた。

「おやまあ、色恋には縁の無い旦那にも恋人が出来たんですかい？」

「そんなんじゃないよ。加えるなら、今一番会いたくない奴でぶつぎりの1位の奴に

会ったよ」

「そらまた、災難だ」

団子屋の主人は銀時が照れ隠しをしているとでも思ったのだろう。
深くは聞かず、去っていった。

「本当に、1位なんだがなあ」

銀時が店の入り口の方を見て言った。

入り口には顔を布で隠した見るからに怪しい者が立っていた。

「入ってきたらどうだ？そんな所に突っ立てたんじゃ目立つぜ」

「お前………。何しに来たアルか！！新八を返すヨロシ！」

神楽が激怒しているのに、神威は笑顔を崩さなかった。

つまり、神威はいつでも新八を殺せる。

そう言いたいのだろう。

神威が笑顔の時は大抵、殺意がある時だからだ。

「実の兄に向かって、それは無いんじゃない？こうして遠路はるばる会いに来たのに」

「会いに来たのにどうして新八を殺そうとしているアルか！！」

これも神威は軽く受け流した。

「やだなあ、抵抗さえしなかったらすぐに返したあげるよ。俺の目的はただ1つ、

お侍のお兄さん、いや、天人のお兄さんを俺達に渡してほしいんだ」

一瞬、神楽と新八は何を言っているか分からなかった。

「な、何を言つて………るんですか………」

傘で首を絞められながらも新八は言った。

神威はもう一度、具体的に言い直した。

「だから、神楽達といつも一緒にいる坂田銀時って人、いや、人じゃない。」

俺達と同じ天人を渡してほしいんだ」

「嘘アル！！銀ちゃん地球人ネ！！お前の戯言アル！！」

すぐに神楽が言い返した。

「嘘か本当かはおいといて………」

神威続けた。

「とりあえず、来てもらっよ。神楽、ついてきな」
新八を人質にされた今、成す術もなく、ただついて行くしかなかった。

「あー、すまん、こういう所はにがてなんだな」

「だったら、こんな所を待ち合わせ場所にするんじゃないよ」

呆れたようにため息をついた銀時。

「だってよく、資料を見たらあまり遠くはだめかと思ってな」

「ふー。俺は今は人間だからそんな心配はないぞ」

「そっぴゃあ、お前は半天人^{ハーフ}だったな」

「そこまで調べているのか。たしか……、神楽の兄ちゃんの傍にいた髭顔だったよな。」

声は変えようが声紋は変えられないぞ。天導衆なんて小さい嘘つきやがって」

「すっげえ、洞察力だな。声紋まで聞き分けられるとはな」

そして、その男は布を取った。

「あらためて名乗らせてもらっ。阿伏兔だ」

「で、その阿伏兔が俺に何のようだ」

ボリボリと頭をかいた。緊張感がまったくといっていいほど無い。

阿伏兔が少し笑った。

「まあ、まずはこれを見ろ」

銀時の視線には、

「んー、んー」

神威が新八を抑えて来た。その後ろには神樂がいた。

「こすい事するねえ」

銀時は不気味なほど冷静だった。

第四訓 あらすじに追いつきたい（後書き）

はあ。まだあらすじに追いつかない。

第五訓 やつとあらずじに追いついた〜！！（喜ぶ事じゃねえ）（前書き）

攘夷戦争の前半、ほとんどの天人が侍を滅ぼそうと、戦争に参加したが、

天人の中でも一番強い天人は収集を言い渡されようがその戦争に参加することはなかった。

彼らは人間と戦いたくなかったからだ。

彼らは人間を好いていた。

だから、宇宙最強の戦闘民族は、侍との戦いを自ら

「放棄した」

そして、彼らの民族は民族名はなかった。

なので、一度だけ彼らを見た人間達は

その美しき銀髪と夜叉のような強さから、

「銀夜族」と名付けようと思ったが、

その村は白夜で太陽が沈まなく、その太陽の光で髪が輝いており、

その姿が美しかったので、

白き夜叉、

「白夜族」

と呼ばれるようになったが、その白夜族は

そのあとすぐに滅んだとされた。

第五訓 やつとあらずじに追いついた〜!! (喜ぶ事じゃねえ)

「で、うちの従業員を人質にとって、何をするんだ？」

銀時が声色を変えずに聞いた。

「いや、話は簡単さ」

阿伏兔が答えた。

「お前、春雨^{うち}に入らないかと交渉しに来たんだよ」

「そうそう」

神威がそれに賛同した。

「断つたら、どうなるんだ？」

やはり、声色を変えずに言った。

「ん〜、お待さんの大切なものを壊しちゃうよ」

神威が笑顔で言った。

「だめです!! 銀さん!!」

人質にされている新八が叫んだ。傘でのどを押さえられているが出せる限りの大声を出した。

そんな新八を見て神楽も、

「そうアル!! こんなバカ兄貴の言うことなんて聞く必要ナイネ!

!」

「ちよつと、2人共黙ってて。今俺はお兄さんと話しているんだよ。阿伏兔」

そう阿伏兔に言つて、新八を渡した。

「つとと」

そして神威は神楽を押さえつけた。

「放すね!! バカ兄貴!!」

「すぐに放してあげるよ。でも少しだけ痛い目にあつてもらつよ」
「!?!」

「やつと表情変わったね。お兄さん。感情がないのかと思つちやた

よ」

神威の言うとおり銀時には先ほどまでの表情はない。神威と阿伏兔をものすごい形相で睨んでいる。

神威はにやつとしたあと、阿伏兔に視線をむけた。

阿伏兔はため息をついた後、少しうなずいた。

「やめろ！！何でそいつらを傷つける必要がある！！関係ないだろ！！」

その前にお前俺を倒すとか言っていただろ！！」

「そうだね。春雨に入ったあとで倒してあげるよ。だって、提督としては入れておきたいだろう。」

宇宙最強の戦闘民族。白夜族を。たとえ掟を破って生まれた半天^ハ人^フだとしてもね」

銀時はハッとした。新八と神楽にバレたのだ。自分が化け物だということが。

すぐに2人を見る事が出来なかったが、少し間を空けて2人の顔を見た。

新八と神楽は目を逸らすどころか、真っ直ぐに銀時を見ていた。

「お、お前ら……」

銀時は目を丸くした。

今までほとんど化け物扱いしかされてこなかったのだ。

「天人だから？どうしたんですか？銀さんは僕達の家族という事に変わりはないですよ」

新八が真っ直ぐ銀時の紅い目を見て言った。

神楽もそれに続いた。

「そうネ！！銀ちゃんは……」

神楽は途中までしか言うことが出来なかった。

神威の押さえる力が強まったからだ。

「うるさいよ。感動の家族話はあとにしてくれないかな？」

神威が銀時の方を向いて言った。

「ほら、大切な人、傷ついちゃうよ」

そう言って、神威も阿伏兔も少しだけ本当に少しだけ傷を首につけた。

少しの血が2人の首から流れた。

それを見た銀時が豹変した。

血・・・・・・

血！？また・・・・・・護れなかった・・・・・・

おれは・・・・・・なんて・・・・・・弱いんだ。

銀時はその場に倒れた。目からは涙が流れていた。

「銀さん!!」 「銀ちゃん!!」

元々大した傷ではなかったので2人は痛みより先に銀時だった。

「ありゃ、あまりのショックで泣きながら気絶しちゃた」

そう神威が言った瞬間、銀時が起き上がった。

そして、こう言った。

「誰？僕の銀を泣かせたのは？許さないよ」

今までに聞いたことのない喋り方だった。

そしてなにより殺気が尋常じゃないくらい出ていた。

第五訓 やつとあらずじに追いついた〜!! (喜ぶ事じゃねえ) (後書き)

あらずじに追いついた!! (やつとかい!!)
意味不明ですいません!!

第六訓 人の秘密を知るとわくわくする（前書き）

この話から後書きに短編を書いていきます。

本編の番外だったり、本編とは全然関係なかったり、色々書いていきます。

え？ だったら短編で別に出せと？

嫌ですよ面倒くさい。

という、ただの面倒臭がりやでした。

あ、ないとは思いますが、リクエストがあつたら教えて下さいね。

第六訓 人の秘密を知るとわくわくする

新八と神樂がかすかな傷で豹変した銀時を見た2人は、

「ぎ、銀さん……………」

「ぎ、銀ちゃん……………」

としか出なかった。

すると、銀時が口を再び開いた。

「安心してよ。新八と神樂は僕が護ってあげる。君達は、銀の大切な人達みたいだから」

いつもの銀時ならするはずのない、そう神威のような笑顔に向けたのだ。

そして、笑みを崩した豹変した銀時は殺気を神威と阿伏兔に向けた。

「銀を泣かした拳句、銀の大切な人を傷つけるとはね」

その後もう一回につこり笑った。

「生きて帰れると思わないでよね」

「へえ。これは楽しそうな戦いになりそうだね。それが君の本性かい？」

神威は笑顔をやめて、おさえつけていた神樂を阿伏兔に渡した。

「本性？何言ってるの？僕と銀、2つで1人なんだ。僕は白」

「まあ、説明は要らないよ」

「そうだよね」

ねを言い終わるか終わらないかで2人はもう動いていた。

2人とも素手だった。

白と名乗った方はいつもの銀時の木刀は使っていない。

「いつもの腰にさしている木刀は使わないの？君は侍だろ？」

「僕は侍じゃない。侍は銀だ。僕は素手で戦う派なんだよね」

そう言っている間にも、2人は防戦攻防をしていた。

「銀さん!!」

「銀ちゃん!!」

阿伏兔におさえつけられている2人はなんとか逃れようと暴れていた。

「おいおい、そんなに暴れないでくれや、おさえてるこっちも辛いんだ」

「だったら放してください!!」

「そうアル!! 加齢臭がするネ!!」

「わー、それはおっさん傷ついちまうわ。……まあ取り引きは失敗だろうから

いいだろう」

そう言つて2人を開放した。

開放された2人は真っ先に白の元へ駆けて行った。

「その程度なの? 白夜族の力つて。ガツカリだよ」

神威は言いながら白の顔に蹴りをいれようとしたが、あっさりはねられた。

「バカ言わないでよ。表に出るのが久しぶりすぎて、体がなまっているだけだよ」

そうは言っているが、神威と同等かそれ以上の力で戦っているのだが、突然神威が動きを止めた。

「まだ、本来の力を出していない。そう言いたいのかい？」

神威は殺気を引っ込めていた。

「そうだよ。なんせ銀が出してくれないもんだからもう8年ぶりぐらいかな？こうして

表に出てくるのは。体もなまるって」

神威はにつこり笑った。

「それじゃあ、つまらないな。今回は俺が引き下がってあげるよ。最後のおかずにふさわしく

なったら、また来て今度こそ殺してあげるよ」

「夜兎の分際で何を言っているんだい？今、この場でも僕は君を殺せるよ」

白も笑っているが、内容は決して穏やかなものではない。

「おー。怖い、怖い。じゃあ、今回はこれで。帰るよ。阿伏兎」

「つたく、お前の都合で動かないでほしいもんだね」

「あはは、提督の命令は聞くもんだよ」

「はい、はい」

2人は何事もなかったかのように帰っていった。

「銀……さん？」

遠慮するように新八は話しかけた。

本当はすぐにも銀時の元へ行きたかったのだが、戦いに巻き込まれるだけなので、ずっと

神楽と一緒に下がっていたのだ。

「僕は銀じゃないよ。僕は銀には白って呼ばれているよ」

あきらかにいつもの銀時と様子が違うのは分かる。だが頭がついて

かないのだ。

「銀ちゃんはどうしたネ!!」
神楽が叫んだ。

「んー。なんて説明すればいいのかな？ていうか、新八達はどこまで知っているんだい？」

「……。。。。。。ぎ、銀さんが半天人^{ハーフ}つてところまでです」

新八は困惑気味に答えた。まだ実感があまりなかったからだ。

「そこまで……。。。。。。か。まず僕の存在を説明する必要があるようだね」

新八達の言うとおり、僕は半天人^{ハーフ}だ。

白夜族がなんで人間と子を作っちゃいけないかという白夜と人間、2つの血を1つの体で持つには、

血が重過ぎるんだよ。まあ、他に理由はあるけど今はいいや。

だから、1つの体に2つの人格を作って、それぞれ血の役割分担をするんだよ。

簡単にいうと、銀の人格の時は人間の血しか体には流れていないんだ。

そして、不思議なことに僕、つまり白に変わると体には白夜の血しか流れないんだ。

だから、今この体には白夜の血しか流れていないということだよ。

「簡単に説明するところだけどわかった？」

白の長い説明が終わった。

「えーと、つまりこうですか？ 銀さんは人間なんですね？」

「そー、そー、半天人^{ハーフ}って言ってるけど、銀の天人っぽいところは見た目だけだよ」

「まだ・・・混乱していますが・・・、大体のことはわかりました」

「こみいった話をしているところを悪いが・・・・。店をどうしてくれるんだ？」

「「「あ」「」」」

3人の声が重なった。

店の外で暴れたとはいえ、あれだけ戦ったのだ。

待ち合わせ場所になっていた団子屋はボロボロになっていた。

「弁償するか、直してくれないか？」

「ねえ。どうしよう。新八、神楽・・・あれ？」

2人の姿はもうなかった。

第六訓 人の秘密を知るとわくわくする（後書き）

「なあ、今日は神楽と定春お前ん家泊めてくんねえ？」

「また、長谷川さんと飲みに行くんですか？本当にアルコール中毒になりま すよ」

銀時が新八にこう頼むのは、初めてではない。もう何回も頼まれている。

どうしてかと聞くといつも飲みに行くと言えろのだ。

「まあな。朝帰りになりそうだからたのむわ」

案の定そうだった。

「はいはい。飲みすぎないでくださいね」

朝帰りになる時は時々、神楽と定春を預けるのだ。

「サンキュー」

預けない時はいつもちゃんと酔って帰って来るので、飲みに行っているの

だと疑ったことはなかった。

・その夜・

「今日は新八の家にお泊リアルか？」

「うん、銀さん遅くなるって言うから・・・」

「あんのマダオまた酒アルか。定春はあんなになっちゃだめですよ」

「ワフツ」

「ツハハ。さあ泊まる準備して」

「ホーイ」

そして新八の家に行き、神楽が寝たころ、

「っあ、万事屋に眼鏡クリナー忘れた。取ってこなきゃ。眼鏡が汚いままだ」

新八は万事屋に向かった。

万事屋は暗かった。

「銀さんはもう飲みに行ったのか」

そうして万事屋に入るため階段を上ろうとすると声をかけられた。

「お、新八君じゃないか」

「長谷川さん！？銀さんと飲んでるんじゃないんですか？」

新八に声をかけたのは銀時と飲みに行っているはずの長谷川だった。

「へ？いや俺はそんな約束してないぜ。ていうかこの頃銀さん冷たいんだ　よ。俺の誘いを断るんだからって聞いている？新八君？」

「あ、すいません。少し考え事を……」

「人が話しているのにそりやないぜ。ま、いいや。今度は付き合ってくれ　ように銀さんに伝えておいて。じゃあな」

「あ。はい。おやすみなさい」

銀さんは長谷川さんと飲んでいるんじゃない？じゃあどこへ行ったんだ。

新八が暗い万事屋で、眼鏡クリーナーを取り、考えていると突然ドアが開いた。

新八は反射で押入れに隠れてしまった。

（あ、あれ？何で隠れたんだろう。銀さんなのに）

「はあ、はあ……」

ドサツという音は座り込んだ音だろう。

（なんで、息切れ？何か……疲れているみたいだ）

新八は少し押し入れの戸を開けた。そして、その有様に驚愕した。

銀時は血まみれだったのだ。

着物が破れていないことをみると全て返り血だろう。

「っち、床が……汚れた。ふいとかねえとな」

汚れたというのは血でという意味だろう。

「はあ……、汚い仕事を受ける時だけ預けていたら、そろそろ

新八あたりが怪しむか……。でも酔っているところを見せない

もつと怪しまれるしなあ」

（！！？朝帰りの時預けている時はいつもこんな血まみれになっての　か……。そして預けてない時は飲みに行っていると思わせるため。

そういえば、神楽ちゃん達を預かった次の日疲れている様子はあったけど

2日酔いっていう感じじゃない）

ようやく、すべての話の合点がいった。

「断ればいいんだけどな……。俺は……。血に慣れすぎた」

（！？）

銀時が闇を抱えているとは思っていたが、こんなにも大きな闇だとは、

思っていなかった。

「さて、朝帰りと思わせるため外に出るか」

床を拭き、着替えた銀時は万事屋を出た。

新八は銀時を止めることもできず、

ただ、帰るだけだった。

END

第七訓 どんな奴にも必ず弱点はある（前書き）

少しジャンプ41号のネタバレあります。

「この攘夷志士白夜叉の首 とれるもんならとってみやがれい」
..... かつこよすぎて何も言えねえ。

何？このかつこよさ。ありえないでしょ。

銀さーん！！

もう早くこのアニメ見たい！！

早く単行本にならないかなあ。

ただ、叫びたかっただけです。

今回の後書きの短編は蛍火の杜へパロです。

原作を知らなくても大丈夫です。たぶん↑

妖の男の子の名前がギンだったので（笑）

次回に続きます。すいません。

最後に、設定がめちゃくちゃですが、そこは温かい目でみてやってください。

原作では現代が舞台ですが、ここでは平安です。

普通に天人もいらっします。

ちなみに、妖怪と天人は別物と考えて下さい。

では、長々失礼しました。

第七訓 どんな奴にも必ず弱点はある

「ったく。ひどいよなあ。新八も神楽も……。いなくなっちゃうなんてさ」

「文句言っている暇があるなら手を動かせ。旦那が壊したんだろい」

「はいはい」

神威との戦いで団子屋を壊した銀時ならぬ白は団子屋を直していた。

新八と神楽には逃げられてしまった。

もちろん、弁償するお金なんて持っていないため、必然的に直す事になる。

なのでブツブツ文句を言いながら直しているのである。

だが、仕事がやたらと早いため、夕暮れには直し終わっていた。

「はあああ。直った……。帰っていい？」

「文句言っていたわりには早いな。よし、いいぞ旦那。もう壊すなよ」

「はいはい。……。あと1ついい？」

「なんだ」

「万事屋に電話かけてくれない？帰り方わかんない」

「は？」

一瞬、時間が止まったような静寂だった。

「銀さん……………。あんた何言ってるんだい？喋り方も子供っぽいし」

「!？」

（しまった！！この人銀を知っているんだ）

「え、えーと、僕は銀の……………ふ……………双子の弟だよ!!」

一世一代の嘘だったが、かなり、いや、確実に嘘と分かる嘘だった。

「……………。そうか……………。わかった。今……………電話してやる」

団子屋の旦那は、嘘をあえてスルーした。

「ほら、繋がったぞ」

「ありがとう」

団子屋の旦那から受話器を貰った。

『もしもし？ぎ……白さん？』

「あ、もしもし新八？万事屋にはどう帰ればいいのかな？」

『は？』

「僕、分かんないだよね」

『あ、はい』

新八も色々ツツこみたかったが、団子屋の旦那と同じくスルーした。

『100mぐらい進んで左に曲がったら、すぐです』

「そう。ありがとう」

そう言って電話を切った。

「ねえ、阿伏兔。これ何？」

「あーそれは、白夜族の資料だ」

「ふーん」

パラパラと資料をめくった。

「へえ。ちゃんと弱点あるんだ」

「でも戦いの弱点じゃないだろ」

「そうだね」

神威は資料を投げた。

白夜族は恐ろしいまでの方向音痴。

この一行が資料からは見えた。

普通は5分あったら着く万事屋に、白は5時間かけて帰ったとさ。

「本当は銀と変わって帰ろうと思ったけど、僕を閉じ込めすぎた衝動ででてこれないんだ。」

「週間ぐらいしたら出てこねるようになるとおもっけど」

その後の白の言い訳 →

第七訓 どんな奴にも必ず弱点はある（後書き）

時は平安。妖怪の存在が信じられていた時代。

妖怪とは別に天人という異人も往来していた。

これは、1人の人間と天人、そしてこれらの者に触ってしまったては消滅してしまう

1人の妖の物語である。

「神楽ちゃん、やっぱやめようよ。この神社には妖怪がでるって、姉上がいつていたよ」

この人間の名前は志村新八。天人によって弱体化した道場を再開しようとしている。

「これだから、新八は新一になれないネ。妖怪なんているわけないアル。

天人と見間違えたネ」

この天人の名は神楽。新八の道場に居候している。天人なのに道場の再開に協力している。

「でも、ここに入ったら2度と出られないとも聞くし……
やっぱ、やめようよ」

と言っている間にも神楽は神社に入ってしまった。

「神楽ちゃーん！人の話はちゃんと聞こう？」

そして神楽は聞くどころか、見向きもせずに、奥に行ってしまった。

「……しょうがないなあ」

新八も仕方なく後をついて行った。

妖怪がでると噂の神社に2人は、入って行った。

奥に進むと緑が広がっていた。

「へえ。綺麗だね。神楽ちゃん」

「な？言つたろ？妖怪なんてでないって」

「いや、何でそんな偉そうなの？」

「ところで、新八」

神楽は新八を無視して話を進めた。

「妖怪はでないけど、帰り道はどこネ」

「え？いや、真っ直ぐ来たから真っ直ぐ戻れば……」

「だから、さっき来た道がなくなってるネ」

神楽が後ろを指差しながら言った。

「え？」

そう言われて後ろを向いた新八は目を疑った。
確かにないのだ。さっき通った筈の道が。

「これって、神楽ちゃん」

「迷子ネ」

あっさりとした態度だった。

「妖怪なんていない、なんて言ったから、妖怪が道を隠したんだよ」

聞き覚えのない声がした。

その声の主の方に2人は顔を向けた。

声の主の顔は狐のお面で隠れて見えないが、渦模様の着物の片腕を
脱いでいて、

腰には木刀をさしていた。そして、銀髪だ。

「あなたは……」

新八が言いかけた瞬間神楽が新八を押しつけた。

「私は神楽ネ！！お前妖怪アルか？」

その銀髪に神楽は触ろうとしたが、銀髪は避けた。

「ちよつ。何で逃げるネ！！」

神楽は触ろうとしているがやはり、すべて避けている。

「ちよつ。待ておつそろしいガキだな」

銀髪は腰にさしてある刀で神楽の頭を叩いた。

「痛いネ！レディに手を上げるとは何事ネ！！」

「手は上げてねえ。木刀を上げたんだ。・・・俺は人間や天人に触ると消滅しちまうんだよ」

一瞬だけ寂しそうな声色で言った。

「っえ」

新八が思わず声を出した。

神楽も黙ってしまっている。

「うお。何だこの辛気臭い雰囲気」

「「お前のせいだああ」」

そう頭に突っ込もうとしたが華麗に銀髪は避けた。

「お前らはそのツツこみで俺を殺すきかあああ!!」

「あ、すいません。いつもの癖で」

「ところでお前の名前は何ネ」

誤りもせず神楽が聞いた。

銀髪は気にしてもなく、

「ん？俺は銀時。坂田銀時。銀でいい」

「わたしは神楽ちゃんネ。銀ちゃん!!」

「ぎ、銀ちゃん……。まあいいか」

銀時は少し嬉しそうに言った。

「あのー。僕の事忘れていませんか？」

新八が遠慮がちにいった。

「おー眼鏡か。お前の名前は？」

「あ、はい。僕の名前は志村……」

「新八」

続きを言ったのは聞いた銀時自身だった。

「え？何で……僕の」

「その神楽に呼ばれていたから」

お面をしていても笑っているのが分かる。

「え？じゃあ最初から……ついてきていたんですか？」

「ああ」

「じゃあ、迷子になるのも知っていたんですか？」

「ああ」

この一言で2人は切れた。

「「おしえろよおおお」」

続く

第八訓 人の秘密を知ると誰かに話したくなる。 (前書き)

今回でようやく真選組がでてきます。

あと、白以外のオリキャラもださないと思います。
面倒なので。いえ、なんでもありません。

今回の後書き短編は前回の続きです。

いっきに完結させたいのですがあと1回くらいありそうです。本編
より長いです(笑)

第八訓 人の秘密を知ると誰かに話したくなる。

「ひーじかたー、死ねい」

ドゴオオオン

という効果音と共にバズーカーをぶっぱなしたのは、説明するまでもなく、

ドS王子こと、沖田 総悟である。そして……

「総悟オオオオオ！ーてめえ、用事のたんびにドアを壊すんじゃない！ー！」

ツツこみをいれたのは、鬼の副長と恐れられるマヨラー……じやなかった、

土方十四郎である。ただ、その鬼の副長も沖田の前では見る影もない。

「土方さん、俺の用事は土方さんを殺すことであ。ということであ俺のために死んでくだせえ」

「お前の首を取ったあとでなら死んでやらあ。山崎が」

「っえ、副長俺ですか！？」

報告をするためにやって来ていた、山崎までもがこの2人の乱闘に巻き込まれた。

「えーと、とりあえず副長、監察結果です。あと死にたくないです」

「そこ、置いとけ」

死にたくないのところを軽くスルーしたことに、恐怖を抱いた山崎だったが、これ以上

乱闘に巻き込まれたくないなので、その場を去った。

「で、用事はなんだ総悟」

本題に戻した土方。

「だから、土方さんを殺しに・・・」

「それはもういいっつの!!」

「へいへい」

わざとらしくため息をついた後、

「さっき、資料室で空気の入れ替えをするために窓を開けたのを、閉めに行ったんですが、

風で資料がバラバラに破れてたんでさあ。まあ、大きく破れていただけなので、テープで直したん

ですけど、その直した資料を見てくだせえ」

土方は沖田から、その直した資料を受け取った。

「なんだ・・・・・・。白夜族？もうとつくに絶滅・・・・・・!？」

土方が読んでいると、あることに気がついた。

「これぁ・・・、万事屋の特徴と一致してるじゃないか」

「やっぱり、そう思いますかい」

沖田がニヤリと笑った。

「どうしやす？土方さん。確かめに行きやすかい？」

「だが、絶滅つて・・・」

「それは人の目で見える範囲です。生き残りがいる確率は0じゃないでさぁ」

「でも、何でそこまでして確かめたい？別にどうでも・・・」

「個人的な興味でさぁ。夜兎をもしのぐ、宇宙最強戦闘民族って書いてありますぁ。」

「1回戦つてみたいでさぁ」

「さぁ、が多いわ！！・・・まぁ、明日は非番だしな。付き合つてやるよ」

「土方さんも気になってるう！！」

茶化すように沖田が言った。

「やかましい！！」

この後しばらく小競り合いをしていたが、真選組の局長、近藤が来

たので一旦止まった。

「おお、トシ、総悟。2人もここにいたか」

土方はさっきまでの表情を一切やめ、引き締まった表情になった。

「どうしたんだ？近藤さん」

「いや、大した用じゃないんだが、明日2人共非番だったよな？」

「ああ。まあ」

「明日、また銭湯に行かないか？前行った時はゆっくりできなかったし」

そう、前は事件が起きたために、近藤の背中がはがれるなどの惨事があった。

そんなこともあったので、2人は誘いを断れなかった。

「セコムしてますかあ！！！！」

ドゴオオオオン

この音は神樂が夢をみて、風呂を壊した音である。

白はすでに入っていたが、1日では直らないので、明日は銭湯ということになる。

幸か不幸か、真選組と会う確率がでてきてしまった。

「銭湯かあ。楽しみだなあ」

→何も知らずに楽しそうな白。

第八訓 人の秘密を知ると誰かに話したくなる。 （後書き）

「で、どうやって出ればいいんですか？」

銀時は新八達の攻撃を全部避けていたので、息切れしていた。

「お、お前らなあ！！俺を殺す気かあ！！まあ、教えなかったのは誤るけど、

人間や天人の肌に触ると消滅するって言うてるだろ！？」

「フン、それも嘘くさいネ」

「いや、マジだから。銀さん死んじやうから」

そう言っているのに、神楽は触ろうとする。

銀時はそれを全力で避ける。その繰り返しだった。

「消えるから！本当に消えるから！！」

銀時が叫んだ。

こんなに必死になっているので、さすがの神楽も、

「ま、もうこのぐらいにしてやるネ」

と、身を引いた。

「で、どう出ればいいんですか？」

「あー。俺が送ってやるよ。ほら、これにつかまれ」

腰にさしてあつた木刀を新八達に突き出した。

「あ、ありがとうございます」

（ここまでするなんて……。本当に触ったら死んじゃうんだ）

そう、考えながらも新八と神楽は木刀につかまった。

神社の中とは思えない深い緑の中を歩いていると突然、新八と神楽の首にヒヤツとした者が、当たった。

「これは……。刀！？」

新八は突然体に嫌な汗が浮かんだ。

「ズラ。何やってんだ、てめえ」

そんな新八とは反対にやる気のない声で、銀時が言った。

「ヅラじゃない。桂だ。銀時、こやつらは……」

「人間と天人だ」

さも、当然というように銀時が言った。

だが、桂呼ばれた者の反応は違った。

「馬鹿者！！銀時！！貴様はこやつらに触ってしまったたら、消えて

しまうん

だぞ!？」

怒ってはいたものの、銀時を心配してるというのは、ありありとわかる。

銀時は頭をかきながら、

「わーってるよ。だからこうして触らないようにしてるだろう」

「わかってない!! なんなら、俺がこやつらを出口まで・・・」

「いいよ。別に・・・。お前は過保護すぎるんだよ」

そこに急に神楽が混ざってきた。

「わたしは銀ちゃんと行きたいネ!!」

よっぽど、銀時のことが気に入ったのだろう。

「ちよつ。神楽ちゃん!!」

新八が神楽を止めに入った。だが、それは銀時がとめた。

「いや、いいよ。別に。ズラも悪い奴じゃねえから」

神楽としばらく争った桂はついに折れたのか、

「まあ、一緒に行くくらいは許してやろう。だが、決して銀時の肌に

触れるなよ。触れたら、その心臓をえぐりだしてやる」

神楽は負けん気が強いとは、いえ、まだ子供である。桂の圧力におびえていた。その証拠に小刻みに震えている。

スパアアアン

銀時が桂の頭を思いつきりはたいた。

「お前は何こんな小さい子いじめてんの？」

「痛いではないか！！それに俺は銀時を心配して……」

「過保護もいい加減にしろよ。お前は俺のお母さんか！」

「む。それも良いな。よし、今日からお母さんと呼……」

「呼ぶかあああ！！！」

銀時が桂をぶつとばした。そして、桂はすぐに見えなくなってしまった。

「大丈夫ですか？なんかものすごい飛んでいきましたけど……」

「

「いいんだよ。いつものことだから」

銀時がケロツとして言った。

「ほら、行くぞ。日が暮れたらやつかいだ」

銀時は木刀を突き出した。新八はつかまったが、神樂がつかまらなかった。

「どうしたの？神樂ちゃん」

新八が神樂に聞いた。

しばらくの沈黙のあと、神樂が小さな声で言った。

「どうして……、銀ちゃんアイツには触れて、わたし達には触れないアルか？」

「神樂ちゃん……」

どうやら、さつき桂の頭を叩いたり、ぶっ飛ばしたので、桂には触れられるとわかったのだろう。

「……おれあ、天人や人間には触れられねえが、同じ妖怪には触れられんだよ」

銀時が遠慮するように言った。

「そう……アルか……」

神樂は少し考えこんだ後、

「よし！！さっさと帰るアル！！」

元気を取り戻した……というよりは、空元気である。

それは、新八、そして銀時も分かっていたろうが、口には出さなかった。

「ほら、ついた」

銀時の案内で新八と神楽は無事に神社の森の入り口についた。

「もう迷うなよ」

銀時がそついい残して、帰ろうとすると、

「銀ちゃん!!」

と、神楽が叫んだ。

「何？」

銀時は振り向いた。

「また明日も来てもいい？」

そう聞いた。新八もそれに便乗して、

「僕もまた来たいです!! 銀さん!!」

そう叫んだ。狐のお面をしているので表情は分からないが、こう言った。

「お前は銀さんかい……好きにしな」

好きにしなというのは銀さんと呼ぶこととまた来ること両方の意味を含んでいるのだろう。

新八が6歳、神楽が4歳の時に銀時と出会った。

次の日、宣言通り、神社の森に来た。が、昨日と違うことが1つあった。

銀時が鳥居の所に座って待っていたのだ。

いつ来るかなんて知らせてないので、ずっと待っていたのだろう。

銀時は眠っていた。

「銀ちゃん寝てる……」

「どうする？神楽ちゃん」

2人は考えていると、神楽がいたずらっ子みたいな笑みを浮かべた。

「このお面取っちゃうネ！！顔を拝んでやるアル！！」

昨日は1度もお面を取った所が見たことがなかったのである。
新八も見たいという気持ちはあった。だが、

「でも、銀さんが消えちゃったらどうしよう……」

「大丈夫ネ！！肌にさえ触らなければ、問題ないネ」

この一言で新八も、

「そっか！！昨日桂さんとかいう人、肌に触るなって言ってたただけだもんね！！」

新八だって、まだ6歳である。好奇心には勝てなかったのであろう。

「じゃあ、取るあるヨ」

神楽が銀時に触らぬように、慎重にお面を取った。

そこには、紅い目が新八達を見ていた。

「君達ねえ、声がでかすぎるよ。誰でも起きるつつつの」

「ごめんなさい！！」

「わあ。それが銀ちゃんの顔アルか！！以外と綺麗アルナ！！のっぺらぼうかと思ったアル！！」

反応はそれそれだった。

第九訓 公共の温泉とかでは泳がないとかあるけど、貸切状態だったら必ず泳い

どうしても、どうしてもやりたかったネタです。

白で銭湯のあのネタをやりたかったんです。でも下ネタはやりたくないと思います。

たぶん
↑

今回の後書きでやっと完結です。

蛍火の杜へのネタでここまで続くとは思いませんでした。
楽しんで頂けたら幸いです。

なんか・・・、本文より長くなったまた（笑）

第九訓 公共の温泉とかでは泳がないとかあるけど、貸切状態だったら必ず泳い

「また君にいい恋してる」

こう調子よく歌っているのは風呂を再びぶっ壊した神楽である。

「神楽、お風呂でセコムのCMみて、勝手に暴れてぶっ壊したのは神楽でしょ？」

冷静にツツこみをいれたのは、白である。1週間ぐらい銀時が出てこれないため、ここ3日間くらいずっと白のままであった。

「でも、白ちゃんも楽しみにしてたのわたし知ってるネ!!」

ギクツと効果音が聞こえるような動揺の仕方である。

「いや、そりゃ、少しは楽しみにしてたけどさ……でもやっぱりお風呂を壊すのは……」

モゴモゴとした言い訳であった。

「ほら!! やっぱりネ!!」

神楽が、してやったりといった顔で言った。

この1言で白の顔は真っ赤になった。

「いや…………それは…………その…………」

もう言い訳もできない状態になっていた。

「白ちゃん本当にかわいいネ!!」

神楽は同じ天人である白に親しみがすぐにわいたのだ。
結構仲良かったりするのである。

「あ、ほら!! 着いたよ!!」

誤魔化すように白が言った。

話しながら来ていたのであつというまだった。

番台のおばあさんが、

「大人200円、子供100」

と言った。

すると、白が

「ねえ、おばあさん、僕見た目22歳ぐらいだけど、中身まだ12、
3歳なんだけど

どうしたらいいのかな？」

「えー白ちゃんそんなに小さいアルか!？」

「え? うん、白夜は普通1000年くらいは余裕で生きれるからね。
体の成長もこれでしばらく

ストップするはずだよ。でも、僕はハーフだからこれでも成長は
早いんだ」

「へえ、すごいアル」

神楽は感動したようだ。

「で、いくらなのかな？」

白が本題に戻した。

「あー、どっちでも良いよ」

おばあさんが言った。なんとも適当な応答である。

「あー、じゃあ明日ジャンプの発売日だから100円でいいや」

そう言って神楽の分と200円を置いた。

「白ちゃん、もう100円プリーズ。フルーツ牛乳飲みたいネ」

が、白はすばやいので、すでにいなかった。神楽はふくれて入っていった。

「わあああ。これが銭湯か!」

白は脱衣場にいた。

「で、どうすればいいんだ？前、銀が来ていたみたいだけど、その時僕寝てたしなあ。

見てないや」

白が頭をかかえていると、

「あれ？白さんじゃないですか？」

声のほうを向いてみると、

「新八！！来てたんだ！！」

「ええ、姉上がまた来たと言って言ったので。ていうか、また神樂ちゃんがお風呂を壊したんですね」

新八はもう状況を把握したようである。

第九訓 公共の温泉とかでは泳がないとかあるけど、貸切状態だったら必ず泳い

銀時が寝ている間にお面を取った方がいいが、うるさすぎて、銀時は起きていた。

銀時は怒ると思ったが、実際は違った。

「見たいなら、見たいって言えば良かったのに」

銀時が言った。

「え？見せたくないから隠してたんじゃないか・・・」

新八が遠慮がちに聞いた。

銀時は少し笑いながら、お面をして、

「だって、こんなでもしなきゃ妖怪には見えないだろう？」

そんなオチだった。

「えー！！じゃあ銀ちゃん本性とかなないアルか？」

どうやら、神楽は銀時は何かに化けると思ってたのだろう。

「化けねーよ。俺は、もとは人間だからな」

あっさりと言ったが、2人には衝撃的だったのだろう。

「「ええー！？」」

「え？そんな驚くことか？俺は元人間。昔、こんな見た目だから親が気味悪がつて、この森に捨てたんだ。その場で終わる命だったけど、山神様が同情して、生かしてくれてんだ。まあ、その代わりに天人と人間に触れなくなっただけ、俺はそれに甘えてすがりついている、幽霊みたいなものだよ」

淡々とした言いようだったが、6歳と4歳の新八と神楽には衝撃的だった。

神楽は目に涙をためている。

「おい、新八、神楽、そんな重たい話じゃあ・・・」

新八と神楽に反射的に触ろうとしたが、2人はのけぞった。

「だめアル！！銀ちゃん！！」

「そうです！！僕達に触れてはだめです！！絶対に！！」

2人はポロポロ涙をこぼした。

「絶対に触れないで」

それだけで2人の心情を悟るのはたやすい事だった。

本当は銀時に触れたいのだ。手を繋ぎたいのだ。抱きしめたいのだ。でも、それは叶わない。それをしてしまったら銀時は消滅してしまう。

小さい2人には残酷な現実だった。

銀時は2人に喋った事を今更後悔した。

結局、今日は2人はその場で帰ってしまった。

銀時は山神様によって生かされている身で、森から離れてしまつては消滅してしまうので、

ただ、帰る2人を見ているだけの銀時は初めて山神様を少しだけ憎んだ。

（1度死んだのだつたら、そのままにしておけば良かったのに・・・）

そうだったら、新八と神楽と出会い、泣かせることはなかった。

人や天人に触れられない体にはならなかった。

「明日も・・・あいつら来るかな」

あんな事を言ってしまったから、来ないだろう。

銀時はそう思ったが、あえて口に出した。

その理由はただ1つ。

新八と神楽にまた会いたいからだ。

出会ってまだ2日が初めてこんな気持ちになった。

だが、銀時はこの気持ちがなんなのかわからなかった。

次の日

「銀さんのところへ行く？」

新八が神楽に小さな声で聞いた。

昨日あんな話を聞いたから、2人の目は泣いて赤かった。

「銀ちゃん、待ってるかな……………」

神楽がいつもの元気な声とは違うか細い声で言った。

せつかく、待っていてくれたのに2人はそのまま帰って来てしまった。

それが心残りだった。

「わからないよ…………。でも……………」

新八は別れ際、お面をしてたとはいえ、悲しそうな様子だったのが気がかりだった。

「わたし……………」

神楽が突然言い始めた。

「会ったばかりだけど…………。銀ちゃんの事好きネ。
また、会いたいヨ」

神楽の好きは恋愛の好きではなく、家族などに使う好きだろう。

この一言で新八は決意した。

「行こう！！神楽ちゃん！！いなかったら森に入って探せばいい！
僕も銀さんが好きだ。だからまた会いたい！！」

神楽もこれを聞いて決意したのか、

「そうアルナ！！行くネ！！」

そうして2人は森へ走って行った。

森に着いた2人はまず驚いた。

そこには、2人と同じくらい驚いていた銀時がいたからだ。

待ってない。そう思っていたのに、銀時は立って待っていたのだ。

「お前ら・・・来たのか・・・」

銀時がくりだした。

「当たり前ネ！！また来るっていったネ！！」

神楽が偉そうな態度で言った。

銀時は笑っていた。お面は頭にしていたので、顔は見える。

「ごめんなさい！！銀さん！！昨日は帰ってしまって」

新八が銀時に誤った。

「ガキが誤ることあねえよ。悪いのは俺だからな」

「！！じゃあ、許してくれますか？」

新八の顔が明るくなった。

「許すも何も、俺が悪かっただろ。許してほしいのは俺だよ」

新八と神楽の顔はさらに明るくなった。

「銀ちゃん、怒ってないアルネ！！」

「怒ってたら、ここに来ねえよ」

銀時が肩をすくめた。

「森、案内してやるよ。来るか？」

「はい！」

「もちろんネ！」

「じゃあ、これにつかまりな」

例によって、木刀を突き出した。

2人はそれにつかまって、森を案内してもらった。

森から出た頃には日は暮れかけていた。

「帰れるか？俺は森から出れねえから、送れないんだ」

「いえ・・・、それはいいんです。でも・・・」

新八はさっきから寂しそうな顔をしている。神楽もだ。

「銀さん、僕たち、父上の墓参りのために来ていたので、明日、帰るんです。それで・・・」

新八が間をおいた。

「次に来れるのはまた・・・、来年の夏なんです」

それだけ言うつと黙ってしまった。

だが、銀時は、

「また・・・、来年の夏来れるか？」

そう言った。新八と神楽は笑顔に戻った。

「はい!!」

「うん!!」

新八と神楽は毎年銀時のいる森へ通った。

ある日、

「銀、危ねえ。そいつらは人と天人だ」

と銀時の手首を掴んだ。

「うお、大串君。大丈夫、こいつらは友達だ」

「大串じゃないつつてんだろ！土方だ！！いい加減に覚えろや！！
てか、人間と天人、銀に触れるなよ」

最後は新八と神楽に向けられたものだろう。

「はいはい、じゃあね」

銀時が無理やりその場を終わらせた。

何回か、こんな事があったのだが、新八と神楽は悲しそうな顔を
するから、

銀時は避けるようにしている。

自分達は触れないのに妖怪は触れられるそれが悲しくさせるのだ。

だが、銀時が妖怪に好かれてるのは容易にわかるので口には出さ
ない。銀時もそれを分かっている。

こんな事もありながら、何年かたち、新八は16歳、神楽は14歳
になっていた。

10年経つことになるのだが、銀時の見た目は10年前とまったく
変わっていなかった。

いつか、新八と神楽は銀時よりも年をとるだろう。2人はそう思っ
ていた。

「なあ、新八、神楽。今日、祭りがあるんだ」

銀時がいきなり話題をだした。

「祭り……ですか？」

新八が聞いた。

「夏祭りアルか？」

神楽はすでに顔を輝かせている。

「まあ、そんなもんだ。妖怪ばかりだから、小さかったお前らは怖がると思って誘えなかった。でも、ずっと一緒に来たいと思っていたんだ」

銀時が照れくさそうにして言った。

新八と神楽にはこれがたまらなく嬉しかった。断る理由など、どこにもなかった。

「もちろん行きます！！」

「祭りに出ないと夏が終わらないネ！！」

銀時はそんな2人を見て笑ったあと、

「じゃ、いつもの場所で、8時だ。来れるか？姉上とやらに怒られるか？」

「銀ちゃん！！わたし達もう子供じゃないネ！夜遊びぐらい余裕アル！」

「神楽ちゃん、祭りを夜遊びでくらないでね。

えっと、姉上には許可を貰えば分かります」

「姉上の許可が必要とは、まだまだ子供だな!!」

「む、わたしを子供扱いするとは無礼千万ネ!!あんまり、子供扱いすると銀ちゃんに飛びついてやるアル!!」

神楽はこれを冗談で言っただけだった。

また、銀時が

「うわ、それだけは勘弁!」

と言ってくれると思ったのだろう。

だが実際は神楽と新八を見て、

「飛びつくなら、飛びつけばいい。それで消滅するなら本望だ」

そう言った。小さな声で。

「え?今なんて言ったアル?」

神楽が聞き直した。

「いや、何でもねえよ。神楽、俺に飛びつくなよ」

いつもの調子で言った。

これを聞いて安心したのか、

「じゃ!8時アルな銀ちゃん」

「ああ、待ってる」

「では、僕達は一旦帰りますね」

そう言つて、新八と神楽は一旦帰宅した。

そして、午後8時

・・・・・・を30分まわった頃・・・・・・。

「すみません！！遅くなつてしまいました」

そう言いながら新八と神楽は着物で走っていた。

「はあ、はあ、神楽ちゃんの着替えに思った以上に時間がかかってしまつて・・・・・・」

「レディは時間かかるネ！！」

「そんな威張つて言つなよ。まあ、いい。行くぞ」

銀時は両手を2人に差し出した。銀時の両手には、長い布が

巻かれていた。

端に自分の手を巻けという意味だろう。

「今日は木刀じゃないんですか？」

「それだったら、はぐれる可能性があるだろう。巻きつけときゃ安心だろ」

新八と神楽は銀時の心遣いが嬉しかった。

布を巻いた2人は、銀時と祭りをまわった。

妖怪の祭りといっても、人間に化けているので、妖怪だとは一見では分らない。

「すごい！！楽しいアル！」

「皆さん、うまく化けていますねえ」

2人は本当に楽しそうだった。

「おい、あまりはしゃぎすぎるなよ。俺、両手ふさがってるんだから」

銀時はそんな2人をたしなめたが、本気ではないことは簡単にわかる。

「銀ちゃん！！次あれやりたいネ！」

銀時は引つ張られていった。

「げ、大串君じゃないか」

その店は大串と呼ばれている土方が出している出店だった。

「もう、つつこまねえ。お前も大変だな。こんな日も餓鬼のおもりとは」

「つつせえよ」

そう、言い合いをしている間にも神楽は出店の商品を全部獲得していた。

「あーこの餓鬼！全部取りやがった！」

「まあ、いいじゃねえか。じゃあな。土方君」

土方は少しの間黙ったあと、「おお」と言った。

祭りで遊び疲れた2人はもう帰ることにした。

「今日は楽しかったです。銀さんありがとうございました」

「ああ……明日、帰るんだよな」

「ええ、まあ……」

「寂しいあるか？銀ちゃん」

神楽がニヤニヤしながら聞いた。

だが、銀時は

「ああ、寂しいよ。春も秋も冬もいらない。夏がまちどおしくてたまらない。別れた後もすぐにでも会いたくなる」

銀時は少し笑って、自分がつけていたキツネのお面を神楽につけて渡した。

「やるよ」

それだけ言った。

「銀ちゃん、でもこれ……ずっと銀ちゃんがつけていた……」

「いいんだ。もう使わないから」

さっきの発言もあって不安なのだろう。

神楽と新八は素直に喜べなかった。

「ほら、送って行くから」

そんな空気を変えるために銀時が急に歩き始めたので銀時と繋がっていた新八と神楽は足をひっかけ、転びそうになった。

銀時が支えようとしたが2人は咄嗟にギリギリで避けた。そのまま、転げていった。

「おい、大丈夫か！？すまねえ」

銀時が駆け寄ってきた。

「ええ、それより銀さんは・・・」

大丈夫ですか？という言葉は出てこなかった。神楽も茫然と銀時を見ていた。

銀時が薄くなっていたのだ。

さつき、完璧には避けきっていなかった。

微かに、本人でさえ気づかないくらい、銀時に触れていた。

「銀さん！！」

「銀ちゃん！！」

2人は涙目で叫んだ。

その2人とは反対に、銀時は穏やかな笑顔を浮かべていた。

「来い！！新八！！！！神楽！！！！やっとお前らに触れられる！！！」

そう言つて両手を広げた。

2人は迷うことなく泣きながら銀時に抱きついた。

「ごめんなさい、ごめんなさい。 銀さん」

「泣くことねえよ」

「銀ちゃん・・・・・・・・・・」

その後の言葉は涙でつながらない。

「ありがとう。新八、神楽。 また来世で会おう。 今度はちゃんと人間だといいな」

そう言い残して、銀時の身に着けていた、着物と木刀、そして新八と神楽と繋がっていた布を残して

完全に消えてしまった。

新八と神楽は無言で森を歩いていった。
すると、

「さて、貴様ら」

という声に呼び止められた。

「桂さん、土方さん……」

そこにはその2人が立っていた。

「ごめんなさい、銀さんが……」

真っ先にそれを言った。

神楽は黙ったままである。

「それに関してはよい。銀時は願いを叶えたのだから」

「願……い？」

「ああ、あの……人間と天人とは関わろうとしなかった
銀時が貴様らに会ってからは、変わった。貴様らに、触れたいと

願ったのだ。

「……、欲を言えば我らは銀時とずっと一緒にいたかった。だが、銀時は願いを叶えたのだ。ありがとう」

桂がそう言ったあと、土方が

「今日、銀が消えることはなんとなく分かっていた。今日……。俺のことを土方と呼んだ。だが、俺は止めようとはしなかった」

土方が言った。いつも大串と呼ぶのに土方と呼んだ。

その時から、土方は気づいていたのだろう。

「銀はてめーら触れることが願いだったんだ。ならばそれでいい」

土方がそう言ったあと、新八と神楽の泣き声がさらに大きくなってしまった。

「まあ、そう泣くな。貴様らが悲しんだら銀時が悲しむ」

「で、でも……………」

「それより、銀時の持ち物をどれか1つ、譲ってくれんか？」

銀時はここにいたという、証がほしい」

新八は1つづなずくと、銀時が常に腰にさしていた、木刀を桂に渡した。

「ありがとう。それと、最後に1つ。落ち着いたらでいい。

この森にまた来てくれないか？銀時も喜ぶだろう」

この頼みに新八と神楽は、

「あ、当たり前ネ。毎年ここに来てたんだからナ」

「もちろんです。毎年・・・、死ぬまで来ます」

この答えに桂は笑って、

「では、待っている」

そうして、新八と神楽は森を出た。

「よかったのか。これで・・・」

土方が桂に聞いた。

「いいも、悪いもこれが銀時の望みだったんだろう。」

銀時は人と天人に触り、消滅することを選んだ。

・・・それより、この木刀をどう分ける？」

「ツフ。この森には奴に懐いていた妖怪が数えきれねえくらいいるんだ。この木刀は粉々になるだろうなあ」

「そうだな」

そう話してから、桂と土方は森の奥へと消えた。

時は進み、江戸時代。

「おい、神楽！！てめえどんだけ時間かかってるんだよ」

こう言ったのは、万事屋のオーナー、坂田 銀時である。

「レディは時間がかかるネ！」

「んなこたあ、どうでもいいんだよ。祭りに行かねえぞ」

「それは嫌アル！！」

ドタドタと部屋から出て来た。

「なんだ？その古ぼけたお面は？」

神樂が頭に使っていたのは年季の入った狐のお面だった。

「これは、家宝ネ！平安時代から伝わってるアル」

「あつそ。そんな大事なのをしていっていいのかよ」

「今日は特別アル」

「ふーん」

「何アルカ！！その疑いの眼差しは！」

乱闘が始まると思われた時、

「銀さん、神樂ちゃん、行きましようよ」

と、新八が万事屋に入って来た。

「なんだあ、新八、おめえまでそんな古ぼけた着物を着てきて。まさか家宝と言い出すんじゃないんだろっな」

「いや、家宝とかそんな大層な物じゃなくて平安時代から、祭りではこれを着てるんです」

今、新八が着ているのは、神樂のお面と負けず劣らず、古い着物だった。

「お前も平安かい！
まあ、いいか。行くぞ」

万事屋の3人は祭り会場へと向かった。

「かーつらー！！」

向かう途中真選組とそれから逃げている桂に出会った、

カッスン

何かが落ちる音がした。

それは桂と土方が落とした物で小さな木の欠片だった。

「む、少しまって頂きたい。これは平安から伝わる大切な物だ」

また、平安かい！とツツコミたくなったが、厄介には巻き込まれたくないので、やめておいた。

「奇遇だな。俺もこの木は平安から伝わる（以下省略）」

「桂と同じものを持つてるなんて……。きもいでさあ。
……死ねよ土方」

「最後のはいらねえだろ！！総悟！！てか、逃げるぞ桂が！」

逃げる桂と追いかける真選組は去って行った。

「なんだあ、今平安ブームでもあるのか？どいつもこいつも」

と、呟く銀時の背中に新八と神楽は抱きついた。

「おわ、なんだなんだ」

突然だったのでよろいめいた。

「いいじゃないですか」

「そうアル!!」

2人は何故かは自分達でも分からないが嬉しいと思った。

「つたく、しょうがねえなあ」

銀時は新八と神楽を振り落とそうとはせずにそのまま、
祭り会場へと向かった。

ここは山神が住んでいたとされる森の奥深く。

3本の木に、古いが決してちぎれない布が巻かれていた。

そして、真ん中の木には銀、左の木には新八、右の木には神楽
と彫られていた。

END .

第十訓 調子に乗っているやつは背泳ぎをする（前書き）

久しぶりです！！

テスト三昧でした！！

やっと今年のテストをすべて終えました！

皆様お忘れだと思いますが、お付き合いください！！

今回の後書き短編は銀八先生を中心に短い話を書いてみました。

最後のはもしも銀さんがゝだったらで、もしも銀さんが攘夷戦争の後、めちゃくちゃ性格丸くなっていたらっていう話です。

銀さんキャラ崩壊のレベルじゃないくらい崩壊しています。

第十訓 調子に乗っているやつは背泳ぎをする

「いやー、前は色々あってゆっくりできなかったから、気持ちいいですねえ」

おじいさんみたいなことを言っているのは新八である。

前は入れなかった大人風呂にゆっくりつかっている。

ちなみに白は子供風呂に入っている。

「新八！！すごいよ新八！！お風呂なのに泳げるよ！！」

「いや、泳いじゃだめだよ白さん」

ガララッ

「いやー。お妙さんのおいがするぞ！！トシ！！総悟！！」

こんな変態発言は言うまでもなく近藤のセリフである。

そして、あら不思議！！女風呂の方から大量のオケが飛んできて、すべて見事に近藤に命中した！

「近藤さん、頼むから覗きなんてしないでくれよ。現行犯になっちゃうから」

こういうのはフォロ方・・・じゃない・・・、土方である。

「土方さんの存在自体が現行犯でさア」

トS発言はサド王子……ではなく沖田である。

出会う確率があると書いていても出会わないのはまずないのである。

それが小説だ!!

「あんたら何しにきたんですか!」

「銭湯に来てやることは1つだろうが」

土方が言った。まあ、確かに銭湯に来てタップダンスを踊る人はいないだろう。

「ま、まあ、そうですね……」

(まずい……、白さん……)

新八は白が絶滅したと思われるいた天人だとバレたらやっかいだと思ったからだ。

が、そんな新八とは反対に白は、

「あ!!真選組だ!」

「……し……銀さん!!」

うっかり叫んでしまった新八である。

「ちょっとあんた！！いつだか団子屋のおっさんには警戒してなん
でこの人達には警戒しないん
ですか！！」

こんな2人のやり取りを見て頭のまわる土方は気づいた。

「やっぱり、お前……、人間じゃねえな」

そういつて、白をにらみつけた。

「うん、僕は確かに人間ではない。でも、天人でもないよ。その中
間さ。」

でも、教えたのは銀が君たちを信用しているから。それに、僕に
は意思がある。

僕は保護をされたくない。人の意思是尊重するもんだよ」

「つけ、こちらら保護する気なんてなかったぜ。ただ興味があつた
だけだ」

「そんなことより、旦那！今度俺と勝負してくだせエ」

沖田が紛れ込んできたところで、

ガララッ

「おとうさん！！泳いでいい？」

子供口調だが、恐ろしい声だ。

震える体で（白以外）後ろをみると、

あの一族がいた。

「へ、屁怒組さん!？」

第十訓 調子に乗っているやつは背泳ぎをする（後書き）

すいません！！短編は後日書きます！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6188v/>

白夜の瞳に映るのは・・・

2011年12月2日14時45分発行